

## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

## Keio Associated Repository of Academic resources

Title	小野蘭山年譜
Sub Title	A Chronological Record of ONO Ranzan
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.46 (2009. ), p.71- 94
Abstract	
Notes	資料
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20090930-0071">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20090930-0071</a>

## 小野蘭山年譜

磯野直秀

A Chronological Record of ONO Ranzan

Naohide ISONO

来年、2010年は、江戸時代の博物誌を集大成した博物家、小野蘭山が没して200年になる。

ここで云う博物誌とは動植鉱物の記述だが、それは本草（現在の薬学）、衣食住を支える農林漁業、染色・製糸・製紙・製蠟などの手工業、史書や辞書、小説・随筆・和歌・俳諧などの文芸、鳥や虫魚の飼育・園芸・貝殻の収集などの趣味の世界、生花・絵画・彫刻などのほか、民俗、民話、子供の遊びにいたるまで、日常生活のすべてに関係している。動植物の種類は東西南北で異なる上、同一の種類でも土地ごとに呼び名が変わる。博物家は広く目配りして、それぞれの種類の形状、有毒か無害か、どのような用途があるか、どの病気に効くか、いつ頃に日本に持ち渡られたか、等々を人々に伝えなければならない。品名の誤認で混乱が生じないように、方言も数多く集め、広域で通じる共通名と対比することも求められる。

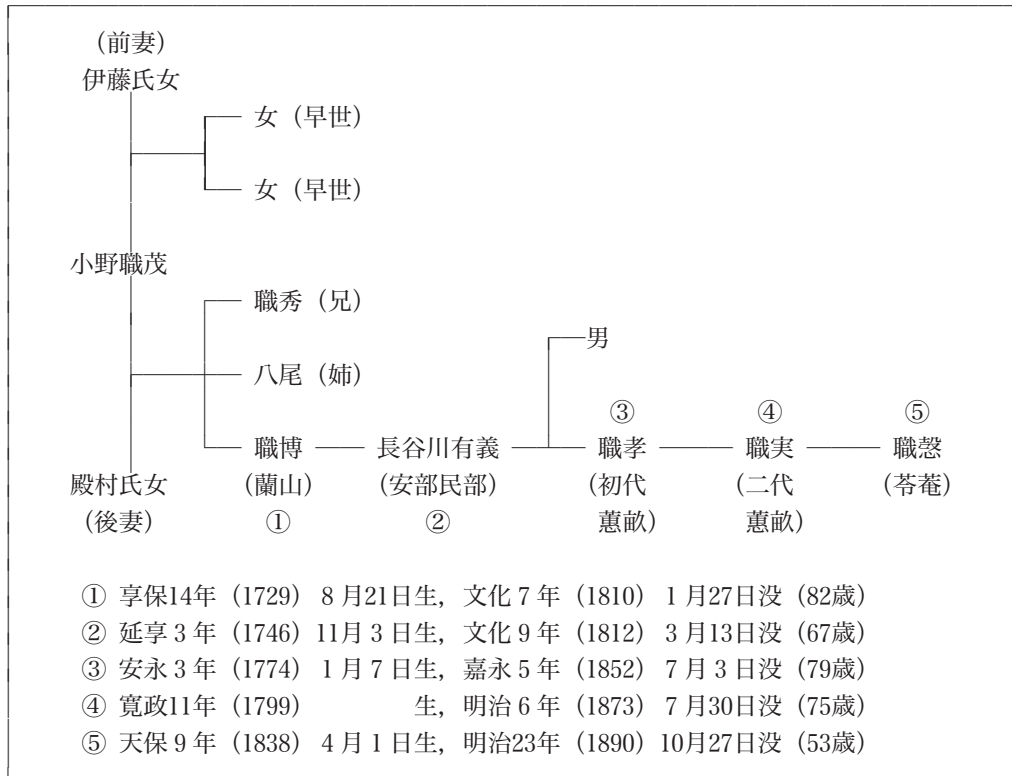
蘭山は博物誌の整理と普及に一生を捧げた人であった。享保14年（1729）に京都で生まれ、ほとんど独学で動植鉱物のことを学び、25歳にして私塾衆芳軒を開く。日ならず名声を得、遠近・老若を問わず、その門に入る者が続出した。やがて寛政11年（1799）、71歳のとき、幕府に求められて江戸に移り、幕府の医学館で講義するとともに、関東各地はもとより、遠く紀伊・木曾の地にまで採集の旅に出た。また、江戸時代の博物誌を集大成したとされる名著、『本草綱目啓蒙』48巻27冊を出版する。本書は、本邦の動植鉱物の歴史に関心を抱く人々の座右の書であり続けているとともに、国語学ではいまも方言研究に欠かせない資料である。

文化7年（1810）1月27日、蘭山は江戸で没した。享年82。弟子は1000人を超える。

不思議なことに、このような人物でありながら本格的な伝記は一つも無く、詳細な年譜も作成されていない。そこで、十分ではないが、本誌に年譜を掲載した次第である。

---

〒 232-0066 横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Mar. 16, 2009]



小野家の系図：【2, 22▶132頁】による

年譜凡例

- 1 年齢は数え歳である。
- 2 日不明の事項はその月末, 月不明の事項はその年末に置く。
- 3 【1】【2】……は出典の資料番号。資料一覧は稿末にある。
- 4 【14▶解説】は, 資料14の解説部分を指す。他にもこれに準じる。
- 5 ☆は同一事項内での区切りを示す。
- 6 ➡は関連事項の掲載年月日, 書名, 注記などを示す。➡1800末は, 1800年の年末項を指す。
- 7 [ ] は著作の角書を示す。
- 8 引用文の漢字・仮名は現行字体を用い, 合字は開いた。
- 9 若干の事項には注を付し, 注は年表の後に置いた。

和暦（西暦）	歳	記事
元禄9年（1696）		<ul style="list-style-type: none"> <li>6月29日、蘭山の父、小野職茂<small>もとしげ</small>が生まれる。小野家は代々朝廷に仕える地下<small>じげ</small>（清涼殿に昇殿を許されない官人）の家柄であった。職茂も主殿寮に勤め、主殿大允<small>とのもだいじょう</small>となった。本姓は佐伯、佐渡守のち伊勢守、号は識意齋。初め、伊藤三位家貞卿の娘を妻とし、2女が生まれたが、いずれも早世し、妻も享保3年（1718）に世を去った。後妻は彦根侯家中・殿村源兵衛実盛の娘で、享保7年（1722）に嫡男職秀、同12年（1729）に娘の八尾、その2年後に蘭山が誕生している【2】。居宅は京都の梨木町、ついで京極十念寺横町、塔之段桜木町。松岡玄達に20余年師事して、神学（神道）と本草を学んだ【10, 19】。</li> </ul>
享保14年（1729）	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>8月21日、小野職茂の次男として、蘭山が京都桜木町で誕生する。母は殿村氏（注1）。幼名乙丸・佐二郎。名は初め職房、のち職博<small>もとひろ</small>、希博も用いた。字は以文、通称喜内、号蘭山<small>きゅうほうし</small>・朽匏子、堂号衆芳軒。後年には蘭山を通称にも用いた。上に兄職秀、姉八尾がいた【2, 10, 22】。</li> </ul>
享保18年（1733）	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>6月4日、母が没し、京極今出川の北、蓮台山阿弥陀寺に葬る。法号は観了院寂室妙照【2】。→次項</li> </ul>
元文元年（1736）	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>8月22日、父の職茂が没し、阿弥陀寺に葬る、年41【2, 10】。法号は無量光院秋月浄照居士。蘭山は幼くして両親を失ったことになる。→前項</li> </ul>
元文4年（1739）	11	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢書『秘伝花鏡』を愛読し、全巻を手写する【24】。</li> </ul>
寛保元年（1741）	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>2月28日に『泉州図上』、4月20日に『河内図上』を手写。ともに、いわゆる『享保元文産物帳』の図譜で、底本は松岡玄達の門人であり、その塾頭もつとめた津島如蘭の所蔵本だった。→（注2）</li> <li>この年、松岡玄達に入門【19, 24】。前項で示したように2月には玄達門人の所蔵本を写している点を考慮すると、入門は本年初頭か。</li> </ul>
寛保2年（1742）	14	<ul style="list-style-type: none"> <li>6月3日、『義軒日抄』を手写【13A】。6月、漢書『金漳蘭譜』を手写する【24】。12月8日、漢書の『三才図会』『王氏彙花』『遵生八牋』3点を抄写する【13A】。</li> </ul>
寛保3年（1743）	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>3月25日、漢書『蟹譜』を手写、7月6日に漢書『錦繡万花谷』を抄写する【13A】。</li> <li>12月28日、『本草綱目惣目和名』を写す【13A】。本書は『本草綱目』寛文12年和刻本の附録、貝原益軒著「本草綱目品目」と思われる。</li> </ul>
延享2年（1745）	17	<ul style="list-style-type: none"> <li>8月17日、姉の八尾が没する、年19【2】。</li> </ul>

- 延享3年(1746) 18

  - 8月, 漢書『嶺南衛生方』を写しはじめる。寛延元年(1748)4月に転写終了【13A】。転写に3年近くを要しているが, この翌年に師の玄達が没して, 書物借出が難しくなったのではないか。
  - 11月9日, 漢書『居家必備日用雑字』を手写【13A】。
  - 7月11日, 師の松岡玄達(怨菴, 怡顔齋)没, 年79。以後, 蘭山は他の学者には就かず, 独学で本草を学ぶ【10】。
  - 11月3日, 侍婢が蘭山の子を産む。婢は暇を出され, 子はのちに長谷川家の養子となり, 長谷川有義(安部民部)と名乗る。有義の子の長谷川佐一郎が, 蘭山を嗣いだ小野職孝である。→1759 ☆蘭山は以後, 終生娶らなかつた【10, 22】。
  - この年, 漢書『日食方物』を写す, 底本は松岡玄達の手写本【13A】。
- 寛延元年(1748) 20

  - 10月25日, 漢書『紀錄彙編』を手写【13A】。
- 寛延3年(1750) 22

  - 7月30日, 松岡玄達の遺著『[怨菴先生]詹々言』を手写。この手写本は東洋文庫に残る「詹々」は「饒舌」のこと。
- 宝暦2年(1752) 24

  - 10月9日, 漢書『竹譜』を手写する【24】。
- 宝暦3年(1753) 25

  - 4月中旬, 桜花30余品を詠み込んだ和歌21首を作り, 「狂吟二十一首」と題する【24】。のちに「花鑑」と改題する。→1808・6月
  - 京都河原町通・蛭子川北入ルに借家し, 学塾衆芳軒を開く。やがて弟子が増えたので, 河原町通・蛭子川南入ルに移る【10, 20】。☆年代は不明だが, 寄宿生の外出規則「範塾規」が残っているので, 寄宿する門下生が居たこともあつた【19】。
- 宝暦4年(1754) 26

  - 3月, 自ら篆刻した印章を集め, 『志雅堂印譜』を作成。「衆芳軒」「蘭山居士」の印もあり, すでに「蘭山」の号を用いていたことがわかる。現在は行方不明。☆蘭山には篆刻の趣味があつた。とくに「人中第一愚人」の印文をもつ印を好み, 揮毫した書画などで気に入つたものだけに捺したとといわれる【25】。→1763
- 宝暦7年(1757) 29

  - 10月7日, 『本草綱目』講義用の覚え書(Ⅰ)を書き終える。国会図書館蔵『本草綱目草稿』は『本草綱目』講義用の覚え書4冊で, この覚え書Ⅰと, その後に作成した覚え書Ⅱが含まれている。いわばⅠは第一版, Ⅱは第二版。Ⅱはおそらく天明3年(1783)までに大要を記し, 江戸に移つた晩年まで補足・訂正を続けたもの。どの頁も細字での書き込みや訂正で埋まり, 余白が無い。大半の丁では袋綴じの折り目を切り開いて裏面まで用いている【18】。→(注3)
- 宝暦9年(1759) 31

  - 5月8日, 蘭山の実子が長谷川家の養子となり, 長谷川有義と名乗る。本姓は安部, 通称は民部。その次男が職孝で, のち蘭山の後継者となる【4▶親類書】。

- 宝暦13年 (1763) 35
  - 9月, 松岡玄達門下, 蘭山の兄弟子島田充房(不磷齋)が図説『<sup>か</sup>花彙』草部の巻1・2を刊行。
  - 3月, 『花彙』草部巻3・4と木部巻1～4を蘭山が執筆し, この月「後編引」を記す。図は葉の裏側を黒く示すのが特徴。☆木部巻1の序で, 蘭山は画も自分が描いたことを述べ, 「希博」の名を用い, 「人中第一愚人」の印を捺している。→前項, 次項, 1754
- 明和2年 (1765) 37
  - 11月, 小野蘭山・島田充房著『花彙』全8巻, 刊。蘭山の最初の刊本。→前項, 1843, 1873 ☆『花彙続編』の稿があった【22A】が, いま行方不明。
- 明和3年 (1766) 38
  - 4月15日, 白井【25】は蘭山が京都東山也阿弥楼で産物会を開くと記すが, 会主は鑑古堂(順照寺の僧弁)で, 蘭山ではない【16】。
- 明和6年 (1769) 41
  - 2月, 稲生若水著『<sup>けつぼうきよべつ</sup>結髦居別集』を手写する。この手写本は東洋文庫に残る【32】。☆若水は加賀藩に仕え, 『庶物類纂』を編集した。蘭山が学んだ松岡玄達は, 稲生若水の弟子であった。
  - 7月, かつて手写した漢書『<sup>せつ</sup>金漳蘭譜』『<sup>らん</sup>蘭譜』『<sup>たけ</sup>竹譜』『<sup>し</sup>師騰禽經』『<sup>せつ</sup>禽譜』『<sup>せつ</sup>蟹譜』を『<sup>せつ</sup>説郛』で校補する【13A, 27】。
- 明和7年 (1770) 42
  - 7月6日, 漢書『<sup>せつ</sup>香譜』と『<sup>げんゆう</sup>范成大菊譜』を手写する【24】。
- 明和8年 (1771) 43
  - 9月, 門人中山玄又が蘭山の『<sup>ほん</sup>本草綱目』講義を筆記した『<sup>ほん</sup>本草記聞』を書き終える。講義期間あるいは講義録筆写完了の年記を記した蘭山講義録のなかで, もっとも古い【29】。
  - 12月, 漢書『<sup>くわ</sup>広東新語』を写す。中国広州を中心とする物産文物事典で, 南方系動植物を知るために江戸時代の博物家がよく利用した。この蘭山転写本は東洋文庫に残る【32】。
- 安永元年 (1772) 44
  - 6月, 松岡玄達の遺著『<sup>い</sup>怡顔齋蘭譜』刊, 図は蘭山が描く。
- 安永2年 (1773) 45
  - 夏, 寒葉齋描く讃州産魚類図巻の各品に和名を付する【19A】。
- 安永3年 (1774) 46
  - 1月7日, 小野蘭山の孫, <sup>もとたか</sup>職孝が生まれる。蘭山の実子長谷川有義の次男, 母は広幡大納言家来太田近江守の娘。名は職孝, 通称は<sup>ぎようぶ</sup>刑部・佐一郎, 字士徳(子徳), 号蕙畝(初代)【4▶親類書】。のち, 蘭山の後継者となる。→1800・10月
- 安永4年 (1775) 47
  - 6月1日, 門下石田 <sup>ひろし</sup>熙が, 蘭山の『<sup>ほん</sup>本草綱目』講義の筆記録である『<sup>しん</sup>珍綱解説』を書き終える。→1780末
- 安永8年 (1779) 51
  - 4月25日, 木村兼葭堂, 上京して蘭山宅を訪問【5】。このときが初対面らしく, 入門もこの日か。
  - 9月3日, 木村兼葭堂, 本日より25日まで京都に滞在し, 蘭山の『<sup>ほん</sup>本草綱目』および『<sup>たい</sup>大和本草』講義を受講する【5】。その日程は——5日午後本艸湿草, 11日午後灌木, 13日午後倭本艸魚部・同夜本艸鳥

- 部, 15日午後本艸湿草, 16日午後本艸灌木, 18日午後倭本艸魚部・同夜本艸鳥部, 20日午後湿草。「倭本艸」は『大和本草』, それ以外は『本草綱目』の講述と思われ, この頃はいずれも5日置きに4通りの講義を平行して行っていたとわかる。
- 安永9年(1780) 52
- 9月13日, 『大和本草』講義を開始, 天明3年(1783)6月8日に満会。『大和本草会識』は門下寺尾隆純によるその講義録【24, 29】。
  - 12月6日, 『雑字簿』(訳官雑字簿)を手写し終わる(国会図書館所蔵本の蘭山後書による)。長崎通詞の作成に係る漢和对訳辞書で, 「花草・樹木」「虫蛇」「珍宝」など, 25部に分かれている。
  - 安永4年～本年のあいだに, 蘭山の『本草綱目』講述をまとめた『本草綱目訳説』が成立。編集は門下の石田<sup>ひろし</sup>熙・岡田麟を中心に, 蘭山も関わったかという【29】。後年刊行の『本草綱目啓蒙』も, 当初は「本草綱目訳説考正」の仮題だった(→1800・5月9日)ことが『訳説』本への蘭山の関与を裏付ける。いわば本書は衆芳軒編講義録で, 門下の閲覧・転写が許されたのだろう。事実, 多数の写本が伝わる。  
→1791
- 天明2年(1782) 54
- 3月4日, 『秘伝花鏡』講義を開始, 本年12月9日に終了。『秘伝花鏡会識』は門下寺尾隆純によるその講義筆記【29】。『秘伝花鏡記聞』も同じ講述を記録したもののだが, 開始を3月13日とする。
  - 4月10日, 在京中の木村兼葭堂, 蘭山邸を訪問。12日・15日にも立ち寄る【5】。
- 天明3年(1783) 55
- 3月27日, 蘭山, 大坂の木村兼葭堂宅を訪れる。29日, 早朝に帰京する蘭山を兼葭堂が船乗場で見送る【5】。
- 天明4年(1784) 56
- 1月, 『本草綱目』の講義を開始, 翌年4月に終了。『本草綱目会識』はその講義を門下寺尾隆純が筆記した講義録【29】。
  - 3月, 木村兼葭堂, 内門(上級の弟子)を許され, 誓盟状を差し出す。内容は非常に厳しく, ①講義筆記録などを部外者には見せない, ②本草の学を止める際は講義筆記録などをすべて返却する, ③本草書を出版するときは必ず許しを得る, ④秘伝は親兄弟にも伝授しない, 等々。
- 天明5年(1785) 57
- 3月7・8日, 木村兼葭堂が蘭山を訪問。この後も, 天明7年3月, 寛政2年(1790)9～10月, 同3年9月と, 上京の度に数回ずつ蘭山宅に寄っている【5】。
  - 九月, 宋・鄭樵著『昆虫艸木略』和刻本, 刻。蘭山が訓点と和名を付す。
- 天明8年(1788) 60
- 1月30日, 京都大火。河原町の衆芳軒も焼失し, 鞆屋町大仏<sup>きや</sup>正面下ルの門下吉田立仙宅に身を寄せる【10】。

- 11月10日、大火で講義もできなくなったので、本日から年末にかけて、吉田立仙宅（→前項）で動植鉱物についての小論集『衆芳軒随筆』『水火魚禽考書』『南楼随筆』を順次執筆する【17】。☆『衆芳軒随筆』中の「<sup>らい</sup>ノ鳥」によれば、蘭山は若い頃に白山と立山で採薬したことがあるらしい。☆この後、<sup>ひがしのとういん</sup>東洞院通丸太町下ル（家主は門人の下村球二）、ついで<sup>あい</sup>間之町通丸太町下ル大津町（家主は門人の中山玄又：→1771・9月）に移り、そのいずれかで衆芳軒を再開【10, 20】。
- 寛政元年（1789）61 ● 4月8日、実兄小野職秀没，年68【2】。

● 8月（21日であろう）、六秩の賀を祝う（還暦祝）。自作の詩、  
「濁酒酌生辰 寿章邂逅新 徒驚書未就 已作杖郷人」【10】
- 寛政3年（1791）63 ● 11月、源 九龍、『本草記聞』（蘭山記聞）を作成。蘭山による明和年間（1764～71）の『本草綱目』講義筆記録を軸に編集したらしく、『本草綱目訳説』（→1780）とともに、多数の写本が残る。しかし、九龍は門下ではなく、編集に蘭山や門下は無関係らしい【29】。

● 12月13日、『本草綱目』寛文12年和刻本の校正に着手，次年2月25日に完了【12】。この蘭山校正本は東洋文庫に現存する【32】。
- 寛政4年（1792）64 ● 3月、志筑忠雄著『万国管關』の抄録を手写。本書は海外の地理・天文・博物記事などを収録し，当時の博物家などが海外事情を知るのに重宝した。この資料も東洋文庫が所蔵する【32】。
- 寛政5年（1793）65 ● 6月2日，山本亡羊（16歳）が入門。蘭山の江戸行の後，京都の本草家・博物家の中心となり，山本読書室を主催。蘭山没後50年には記念会を開いた【21】。→1859
- 寛政7年（1795）67 ● 5月24日，門下の村松標左衛門らしい人物宛の書簡草稿を書く。それには，①松岡玄達は儒書・神書・<sup>ゆうそく</sup>有職故実・医学・本草などを教えたが，治療はしなかった。晩年は儒書・神書・本草の講述だけだった，②蘭山の父は20余年，兄は10余年玄達に師事した，③蘭山も玄達に入門したが，「業を受ル事，只五ヶ年ニして先生物故せられ」とあり，他の記録と併せ考えると，蘭山は13歳で入門したらしい（→1741），④玄達は弟子を採薬に連れ出すことが少なかった，⑤玄達は秘伝を多く設けていた，⑥蘭山は山野での実物教育を重んじ，薬物には秘伝を作らぬ，など重要な記述が多い【19】。
- 寛政8年（1796）68 ● 水谷豊文（18歳），この年か前年に入門【31A▶年譜・参考欄】
- 寛政9年（1797）69 ● 4月中旬，常陸の木内政章が来京して入門。翌春まで京都に滞在し，蘭山の講述を聞く。杏雨書屋蔵『本草綱目紀聞』【15▶7節】は，その時の講義録ほかを編集したもの。この頃の衆芳軒は<sup>あい</sup>間之町にあったことも記述されている。→1788・11月



- 寛政10年 (1798) 70
- 9月10日, 蘭山, 門人たちと白川山より比叡山に登って採葉する (前項『本草綱目紀聞』▶題言)。
  - 3月21日, 京都東山の端寮で古稀の宴が開かれ。蘭山は草木10品についての稿を門下に与えた。それを蘭山の筆跡のままに刻したのが『十品考』で, 本月中の刊行という。また, 自作の詩,  
「曾言多病質 何得寿長年 幸喜蓬蒿裡 更逢杖国筵」【10】
  - 10月5日, 幕府, 蘭山を幕府医学館に招聘し, 蘭山は承諾。ただし, 老齡の故, 春暖かくなってからにせよと, 京都奉行が通達【4, 10, 26▶書簡2】。この招聘は幕府若年寄の堀田正敦および医学館主多紀元徳もとのりの意向という (→次年3月)。☆堀田正敦まさあつ (摂津守) は堅田藩主, のち佐野に転封。寛政2年~天保3年 (1790~1832) の長きにわたって若年寄を勤めて文教面に携わる。蝦夷地の探索や『寛政重修諸家譜』の編集などにも関わった。栗本丹洲・大槻玄沢・岩崎灌園・屋代弘賢などと親しく, 自身も優れた博物家だった (→1800・5月)。
  - 12月2日, 能登の門下村松標左衛門に書簡を送り, 内門 (上級の弟子) になる資格について記す【26▶書簡2】。それによると, 講述に通ってくる弟子は『本草綱目』の会読を一巡した場合, 遠方の弟子はそれに準じる経歴をもつ者という。なお, 書簡のなかに, 「金銀ヲ以テ相許候事ニテハ無御座候」の一文がある。
- 寛政11年 (1799) 71
- 3月11日, 京都を出立して, 江戸へ向かう (→前年10月)。門下の吉田立仙 (→1788・1月) が同行。16日には名古屋で門下の水谷豊文たちに会い, 23日には駿河原宿にある植松与右衛門の有名な帯笑園 (→1802・2月) を見たりして, 3月28日に江戸到着【10, 14】。☆役名は, 他に例の無い「物産者」, のちに「御医師並」, 30人扶持。☆孫の長谷川佐一郎 (のちの小野職孝) も本年江戸に移って蘭山の世話をしたが, 同行したか, どうかは不明。職孝は, 遅くとも11月8日には江戸にいた【14】。
  - 3月, 『[校正] 救荒本草・救荒野譜並同補遺』和刻本, 刊。師の松岡玄達が享保元年 (1716) に刻した同書と和刻本の版木が京都大火で失われてしまい (→1788・1月), 書肆長松堂が復刻の校正を依頼した。旧版に欠けていた果部の形状説明も, 蘭山が補って出版。
  - 4月1日, 幕医池田瑞仙とともに上野道灌山で採葉【14】。
  - 4月2日, 幕府医学館での講書を命じられる【14】。
  - 4月4日, 若年寄堀田正敦邸で, 讃岐侯の「海錯写真折本二冊」を拝見, 個々の漢名を尋ねられる【14】。☆おそらく, 讃岐藩主松平頼恭よりたか編『衆鱗図』の第3冊と第4冊【18A▶注24】。

- 4月5日、医学館内に蘭山のため新築された居宅に入る。また、5人扶持・1ヶ年25両と言い渡される【14】。☆この頃までは幕府・蘭山ともに、蘭山の江戸滞在は長くて数年と考えていたようである。➡本年6月
  - 5月4日、居宅での会読を許される【9】。
  - 5月17・18日、京都円山芙蓉楼で「詩経草木多識会」開催。蘭山出府後も門人たちが本草を怠らぬようと、門下の水野皓山・山本亡羊らが開いた。本年秋に『詩経草木多識会品目』を刊行。
  - 6月29日、「当地江罷下候に付、御手当三拾人扶持被下候。生涯当地江住居致、物産筋之御用可相勤候」【9】と言い渡される。30人扶持は医学館主なみの待遇【9】であり、その代わり江戸永住となったのである。☆蘭山が江戸に永住することになって、その世話のために孫の長谷川佐一郎（のちの小野職孝）を江戸に呼んだのかもしれない。
  - 7月26日、医学館主が多紀元徳もとのりから子息多紀元簡もとやすに代わる【9】。
  - 7月28日、11代將軍徳川家斉いえなりに拝謁【9】。
  - 9月25日、幕府の駒場薬園を訪れる【14▶9月23日条】。
  - 10月18日、医学館の居宅（73坪）が狭く、標本などを収納できないので、土蔵を含めて30坪の増築が認められる【9, 14】。
  - 本年、小野職実もとみち（彦安、二代蕙畝けいほ）が誕生【22】。長谷川佐一郎（のちの小野職孝、初代蕙畝）の長男、蘭山の曾孫。
- 寛政12年(1800) 72
- 1月19日、標本や唐蛮の器物を入れた長持4棹が、京都から到着。その品々は將軍・御台所・一橋家・田安家・諸大名などが次々に観覧、筑前子安貝（タカラガイ）・薩摩メサメ貝・牛角灯など5品は幕府に献上した【14】。
  - 2月16日、医学館内薬園の管理を命じられる【14】。
  - 閏4月18日、京都から届いた品々の目録を、幕府からの指示で書き改める（➡本年1月）。杏雨書屋蔵「産物并唐蛮雜具」（注4）がこれに当たる【14, 16】。
  - 5月8日、若年寄堀田正敦に各地の白垂や砂・石類計21品を献上する【14】。正敦は博物に多大の関心をもち、その学識は群を抜いていた。『堀田禽譜』『観文禽譜』『観文獸譜』『観文介譜』など、第一級の著作をいくつも残している。
  - 5月9日、本日付の実子長谷川有義宛書簡下書に、以下の重要な事項が記されている：①『本草綱目』講義録の出版は若年寄堀田正敦などの意向で、前年に計画・着手されていた、②書名は当初の案『本草綱目訳説考正』から『本草綱目啓蒙』に変えた、③出版用の清書は孫の

長谷川佐一郎が担当する、④堀田らの勧めで、佐一郎を蘭山の孫養子にして、後継者として【14】。☆この下書は、白井光太郎が蘭山の日記を写したときは該当個所に挟まれていたが、現在は行方不明である(14▶本日欄, 22▶114~5頁に全文の翻刻あり)。

- 8月5日, 老年につき, 採薬の際に帰宅しかねるときは外泊して構わない旨を言い渡される【14】。日記に個々の採薬記事は無いが, この通達はずで江戸近隣には何回も出かけていたことを示唆する。
  - 8月22日, 駒場(御鷹場?)・志村・鼠山(山手線目白駅の西側)・広尾・国府台こうのだいでの採薬を願い出る。日ならずして許可されたが, 採薬月日は記録が無い【14】。
  - 10月25日, 長谷川佐一郎が, 小野職孝(初代蕙けいほ畝)として祖父蘭山の孫養子となる? →(注5)
  - 11月, 医学館主多紀元もとやす簡は, 「医学館での蘭山の講書は月に12日だが, 開講以来1日も休まずに精勤しているので, 年末に褒賞を与えていただきたい」旨を上申した【12, 30】。→次項
  - 12月25日, 医学館での講書に対し, 白銀7枚を下賜される【14】。前項の上申に基く措置で, 以後毎年暮に白銀7枚の下賜が恒例になる。
- 享和元年(1801) 73
- 2月17日, 日光および諸州採薬の願を, 医学館主を通じて提出, 3月20日に若年寄堀田正敦より医学館主を通じて採薬の命を受ける【14】。以後の採薬も, 常にこのような手続きを経ている。幕命であると, 行程・案内役・食事・宿などを先触れで各町村に手配できるからと思われる。
  - 4月7日, 常毛諸山採薬の幕命を受け, 江戸を出立。門下の小原桃洞(紀伊藩)・井岡 洌れつ・宮地郁蔵, 孫の職孝など, 総勢15名。行程の大意は, 江戸→小金→原→北条→筑波山→男体山→筑波→真壁→足尾山→加波山かばさん→羽黒→西宝寺→宇都宮→今市→日光(4月23~28日)→清滝→足尾→中禅寺→黒髪山→赤沼→湯本→金精明神山→大野山→志津→日光(5月9日)→今市→栗野→佐野さようだ→行田→大宮→板橋→江戸帰着, 5月18日【14】。『常野採薬記』がこの時の記録。『遊毛記』と題する資料もある。☆各地で農民に薬草名・採取の時節・乾燥法などを教えたのは, 若年寄堀田正敦の指示による【14▶3月28日条】が, 元をただすと関東郡代の要望による。しかし, 採薬先では農民多数が労力を求められて迷惑したらしい。のちに, 農繁期を避けること, 同行者も制限すること, 復路は往路と重ならぬようにすることなどを注意されている【14▶1802年2月8日条】。

☆蘭山出府以後の採薬は, 下記の6回である(注6)。

- ①享和元年(1801) 4～5月, 常陸・野州
- ②同 元年(1801) 8～10月, 甲斐・駿河・伊豆・相模
- ③同 2年(1802) 2～5月, 紀伊・木曾
- ④同 3年(1803) 3～4月, 房総・常陸
- ⑤文化元年(1804) 8～10月, 駿河・伊勢・木曾
- ⑥同 2年(1805) 5～6月, 上野・武蔵
- 5月10日, 前医学館主の多紀元徳<sup>もとのり</sup>が没する【14】。
- 5月22日, 常毛採薬で得た草木65鉢と石類1箱を幕府に献上【14】。
- 6月29日, 医学館薬品会, 常野採薬での採集品を出品【14】。
- 8月22日, 幕命により, 江戸を出立, 甲斐・駿河・伊豆・相模での採薬に向かう。孫の職孝が同行(以後の採薬も同じ)。行程の大略は, 江戸→府中→与瀬→猿橋→吉田→富士山二合目御堂泊→富士山六合目(8月30日)→吉田→河口→甲府(9月5～10日: 薬園・金峯山<sup>きんぶね</sup>・御嶽<sup>たけ</sup>・水晶峠<sup>すばしり</sup>・黒平などへ行く)→河口→須走→深山→吉原→江尻→駿府(9月15日)→沖津→吉原→沼津→三嶋→湯ヶ島→天城山<sup>あまぎ</sup>→熱海→三嶋→箱根→芦之湯→神山→小田原→江ノ島(9月29日)→鎌倉→戸塚→品川→江戸帰着, 10月3日【14】。この時の採薬記録が『甲駿豆相採薬記』。『富士採薬記』と題する資料もある。
- 11月9日, 「一昨年ヨリ之綱目, 今日満会」【14】。開始月日は不明だが, 寛政11年(1799)の出府後間もない頃に医学館で始めた『本草綱目』の講書が終了した。このときの講義筆記を編集したのが, 『本草綱目啓蒙』である。不思議なことに, この講義を弟子が筆記した資料は未発見である。☆医学館の講書以外に, 堀田正敦の邸や自宅での講義もあった【22】。☆期間はわからないが, 江戸でも『大和本草』の講書を行なった。『大和本草批正』(井岡 冽)はその講義録である。
- 12月19日, 『常野採薬記』と『甲駿豆相採薬記』を医学館主に提出する【14】。
- 12月23日, 紀伊藩主徳川治宝<sup>はるとみ</sup>の要望により, 翌春に紀伊へ派遣すると幕命を受ける【14】。→次年2月
- この頃, 『博物名譜』が成稿。動植物名の方言・異名辞典で, 方言をイロハ順に配列し, 「ドンクウ ヒキガエル 長崎・島原」のように, 「方言・異名/標準的和名・漢名/使用地名」を記す。中には, 形状を詳しく記述する例もある。全3冊で, 見出し名計1万1260を収録する。講義用覚え書『本草綱目草稿』(→1757)と対になる資料。蘭山自筆本が東洋文庫に残る【32】。
- 2月22日, 幕命(→前々項)で江戸を出立し, 紀伊採薬に向かう。行

程の大略は、江戸→箱根→吉原→原宿（植松与右衛門の帯笑園に立ち寄る）→駿府（2月26日：27日に駿府御薬園を訪問）→浜松→赤坂→宮（3月1日，水谷豊文らに会う）→桑名→関→伏見→大坂（3月7日）→和歌山（3月10～15日）→湯浅→小浦→塩屋浦→田辺→湯崎→<sup>とんだ</sup>富田→<sup>すさみ</sup>周参見→江住浦→大嶋（4月1日）→<sup>こざ</sup>古座浦→<sup>だいち</sup>太地浦→那智→妙法山・那智山→本宮→新宮→井土→<sup>きのもと</sup>木本→<sup>おわけ</sup>尾鷲（4月22～25日）→長嶋→田丸→<sup>おうか</sup>相可→<sup>いざわ</sup>射和→山粕→三輪→奈良→伏見→京都（5月6～10日，<sup>あたご</sup>愛宕山・天台山で採薬）→大津→<sup>むさ</sup>武佐→赤坂（5月13日）→<sup>きん</sup>金生山→加納→大久手→<sup>まごめ</sup>馬籠→塩尻→岩村田→倉賀野→熊谷→上尾→江戸帰着，5月29日【14】。紀伊では門人小原桃洞が行程の一部に同行，帰途の美濃赤坂で西村専吾，のちの飯沼慾斎に会っている。この時の記録が『紀州採薬記』。同行した門人藤某の記した『藤子南紀採薬記』の内容はやや異なるからか，これも写本がかなり流布している。☆駿河原宿にある植松与右衛門の帯笑園はよほど蘭山の気に入ったのか，江戸出府・今回の採薬行・文化元年の伊勢採薬行のそれぞれ途上と，3度も訪ねている。植松家の当主は代々与右衛門を名乗るが，この当時の当主は6代目の季英（号，蘭溪）。

- 9月2日，蘭人が持ち渡った草木・腊葉の鑑定を命じられ，4日に返答。この種の下問が時折あった【14】。
- 9月29日，医学館薬品会。幕医栗本丹洲が所労のため，蘭山が鑑定役を勤める。出品計1742品【14】。蘭山が以後も鑑定役を続けたかどうかは不明。
- 10月上旬，幕臣小林豊章が寛政10年（1798）～享和元年（1801）に熊本・長崎などで写生した『植物逼真』<sup>ひっしん</sup>（杏雨書屋蔵）を，若年寄堀田正敦の命で校閲し，序文を残す【22】。

享和3年（1803）75

- 2月，江戸での講義に基く『本草綱目啓蒙』（初版）巻1～9・5冊，刻【1，15▶4節】。☆出版には幕臣や門人からの資金援助があった。『御用留』【7】文化元年3月3日条には「御老若衆御壺人前六両一分ヅ、」と前金額を記す。→本年3月25日，同12月，1805・6月，同12月

☆本書には四種の版がある。

初版『本草綱目啓蒙』，48巻27冊，小野職孝校，享和3年（1803）～文化2年（1805）刊：影印版→資料28

再版『本草綱目啓蒙』，48巻27冊，小野職孝校，文化8年（1811）～文政12年（1829）？刊

三版『[重修] 本草綱目啓蒙』，35巻36冊，<sup>かけはし</sup>梯 南洋増訂，弘化元年

(1844) 刊

四版『[重訂] 本草綱目啓蒙』, 48巻20冊, 井口望之訂, 弘化4年

(1847) 刊: 翻刻版→『本草綱目啓蒙』, 平凡社東洋文庫

- 3月14日, 將軍家齊への『本草綱目啓蒙』献上願を提出。のちになって、全巻が出版された後にまとめて献上せよと申し渡される【14, 本日条, 4月22日条】。→1805・11月
- 3月18日, 幕命により, 江戸を出立し, 房州・総州・常陸での採葉に赴く。海産動植物の観察・採集が多いのが, 今回の採葉の特徴である。加賀藩医の内山覚中が同行【22】。大略の行程は, 江戸→船橋→五位→鹿野山→百首→保田→竹田→鋸山→那古→清澄山→内浦→小湊→大滝→東金→八日市場→銚子→鹿島→水戸下町→真弓→諏訪→杉室山→町屋→水戸上町→府中→牛久→安孫子→小金→江戸帰着, 4月22日【14】。この採葉の記録が『房総常州採葉記』(東京国立博物館蔵)。内山覚中のものは『常房総三州採葉録』(岩瀬文庫蔵)。いずれも, 他の採葉記と異なって写本が少ない。☆この採葉記に「ミヤマウズラ」や「ビラウドラン, 花戸名」の名が登場するのが, 園芸史の面から注目される。両者が大流行するのは天保9年(1838)頃からで, それに30数年も先立つからである。
- 3月25日, 『本草綱目啓蒙』巻1~9(冊1~5), 江戸書物問屋仲間の割印(注7)により, 刊行・販売を認可される【1】。
- 春, 將軍の命により, 『倭朝禽類異名』を作成。禽類の名をイロハ順に配列し, 標準的和名には方言・異名を, 方言・異名には標準的和名を記す。計1081項で, 約1割は外来種。
- 5月3日, 「御医師並」格になる【7, 14】。
- 5月4日, 房総常州採葉で得た草木11鉢と竹・介・石類計8箱を幕府に献上【14】。
- 6月27日, 能登の村松標左衛門に書簡を送る。そのなかに, 「本艸学急務は採葉宜候。書物も追々出板も有之候由承及候得共所詮他流之書は反て疑惑之基にて御座候間, 御披見御無用に被有候」の文がある。蘭山の考え方の一端を示す【26▶書簡6】。
- 9月6日, 「薬園地, 願之通, 被仰付」【14】。薬園の拡大を蘭山か医学館が願い出たらしい。→次項
- 9月22日, 幕府, 医学館に湯島薬園(600坪)と四谷薬園(1890坪)を渡す【14】。→前項, 次項
- 10月9日, 湯島・四谷両薬園の管理を命じられる【7】。
- 12月23日, 『本草綱目啓蒙』巻10~14(冊6~10), 江戸書物問屋仲間

- から刊行・販売を認可される【1】。
- 文化元年(1804) 76
- この年、『<sup>きゅうほうし</sup>朽匏子格物致微』20冊を著す【28▶年表】。
  - 8月3日、採葉で得た草木のうち、有用な品や珍しい品を書き出すように、医学館主多紀元簡より求められる。医学館は湯島薬園を返上し、代わりに四谷薬園の1300坪拡充を願い出ているためであった。即日、提出する【14】。
  - 8月13日、幕命により、江戸を出立、伊勢・志摩へ採葉に向かう。行程の大略は、江戸→箱根→原宿(植松与右衛門の帯笑園に立ち寄る)→駿府(8月18日着：駿府薬園・久能山薬園に寄る、川留で9月4日まで逗留)→大井川(9月7日)→桑名→津→伊勢山田(9月20日)→外宮(豊宮崎文庫に寄る)→内宮(林崎文庫に寄る)→<sup>あさま</sup>朝熊山→二見→小畑(9月26日帰路へ)→津→桑名→大垣→加納→伏見→大井→三戸野→下諏訪→軽井沢→上州<sup>いたはな</sup>板鼻→武州深谷→桶川→江戸帰着、10月13日。大雨による大井川川留により駿府で長く足留め。ようやく伊勢山田に着いたのが9月20日、日数不足で志摩行は諦める。帰途の大垣では飯沼家に泊まり、木曾路を經由して江戸に戻る【14】。『勢州勢州採葉記』は、この時の記録。『伊勢採葉記』の題をもつ資料もある。
  - 秋、小野職孝編・小野蘭山審訂『飲膳摘要』の稿、成る。出版には門人平井宗七郎が携わった【10】。→本年12月
  - 10月19日、医学館薬品会、勢州採葉品などを出品【14】。
  - 10月22日、駿州勢州採葉で得たボウラン・フウラン・ムギラン・黒珊瑚など計10品を将軍に献上【14】。
  - 12月23日、『飲膳摘要』、江戸書物問屋仲間の割印により刊行を認可される。認可記録には「小野蘭山著」となっている【1】。☆東京大学総合図書館に本年の刊記をもつ刊本が所蔵されているが、流布しているのは文化3年刊本。☆食品の気味・効能を簡潔に述べる点が好評で、「補遺」版や「増補」版もある。→本年・秋、1817、1836
  - この年、幕府紅葉山文庫収蔵の『庶物類纂』を借り出し、抄写本6冊を作成【12】。杏雨書屋蔵『庶物類纂抜粋三十一巻』6冊がそれに当たるか。☆『庶物類纂』1000巻を借り出して全冊を写し、その写本が文化3年の江戸大火で失われた後、再び全巻を転写したというが、その裏付け資料は未見。単なる伝説ではないか。
- 文化2年(1805) 77
- 5月16日、幕命により江戸を出立して、上州・武州での採葉に向かう。行程は、江戸→大宮→熊谷→倉賀野→伊香保→<sup>はるな</sup>榛名山(20~24日)→<sup>みょうぎ</sup>妙義山→平井→<sup>みつみね</sup>長留→三峯山(5月28日~6月2日)→小川町→川越→江戸帰着、6月6日【14】。『上州妙義山并武州三峯山採葉記』また

は『上州武州採葉記』はこの時の記録。これが蘭山最後の採葉行となる。

- 6月9日, 医学館薬品会, 上州武州採葉品を出品【14】。
  - 6月25日, 『本草綱目啓蒙』巻15～29(冊11～16), 江戸書物問屋仲間から刊行・販売を認可される【1】。→次項
  - 6月25日, 『本草綱目啓蒙』巻30～39(冊17～22), 江戸書物問屋仲間から刊行・販売を認可される【1】: 同日に2件を分けて記されている。おそらく帙(数冊をまとめる包)ごとの記録と思われる。
  - 7月18日, 小野職孝, 医学館付薬園の管理手伝を命じられる【14】。
  - 11月1日, 『本草綱目啓蒙』が完成し, 医学館主多紀元簡から御側衆に將軍への献上願を出す, 献上に及ばずと返答される【14▶本日項, 12月項冒頭記事】。將軍側近の思い違いからか。→次々項
  - 11月7日, 若年寄堀田正敦から, オランダ船が享和2年と文化元年に持ち渡った草木5品の鑑定を命じられる【14】。
  - 12月23日, 『本草綱目啓蒙』巻40～48(冊23～27), 江戸書物問屋仲間から刊行・販売を認可され【1】, 『啓蒙』初版本48巻27冊の出版が完了(→前々項)。☆『啓蒙』は江戸での講述を基礎としているが, 以前の講義も活かされていると思われる一方, 出府以後の採葉で得た近年の知見や方言も盛り込まれている【28】。
- 文化3年(1806) 78
- 2月15日, 奥州採葉を願い出ていたが, 老齡を配慮してか, 却下される。近国ならといわれ, 箱根・大山採葉の願を差し出したが, 江戸大火で実現しなかった【14】。→次項
  - 3月4日, 江戸大火。神田佐久間町の医学館が全焼, 同館の土蔵に収納していた『本草綱目啓蒙』の版木が焼失, 構内の自宅も小蔵以外は焼け落ちた【14, 26▶書簡8】。→次項
  - 3月14日, 蘭山は転写のために, 幕府所蔵の『庶物類纂』穀属4帙・竹属3帙を借りて医学館土蔵に収納していたが, それが大火で焼失したので, この日補充を求められた。蘭山はその要求に応えたが, どのようにして補ったかは不明。蘭山の転写した分が災厄を免れ, それから再写したか, 加賀藩が所蔵する副本を転写したかであろう【14, 15▶3節】。
  - 4月27日, 医学館を下谷新橋通・向柳原に移転・再建することを申し渡される【14】。
  - 8月19日, 医学館移転先(→前項)の北に当たる鳥越とりごえに蘭山の新宅がほぼ完成し, 転々としていた仮住まい先を立去って入居【14】。
- 文化4年(1807) 79
- 5月28日, 「向于大手前, 今日本艸綱目会読一周終」とあり, 若年寄



- 堀田正敦邸（大手前にあった）での『本草綱目』会読が満会になったとわかる。開始年月日は不明【14】。
- 6月15日，医学館が再建され，開館【14】。→前年4月。
  - 6月18日，蘭山，医学館での講書を再開【14】。→前項。
- 文化5年（1808）80 ● 3月21日，80歳の祝宴（<sup>てつえん</sup>臺筵）を鳥越の新宅日新楼で開く。集まる者，百余名。蘭山は弟子に新著『<sup>しょうとく</sup>臺筵小牘』の稿を与える。本年6月に出版【10，14】。自作の詩，
- 「東来倏忽十星霜  
 遲日新楼醉寿觴  
 三万六千虧八九  
 猶思徒假数年長」
- 4月22日，孫小野職孝，採葉のために江戸を離れ，関西に向かう。京都では，6月2日に山本亡羊たちが東山双林寺文阿弥で物産会を開いて歓迎。6月15日，江戸へ帰着【14，21】。予定では白山・立山も採葉地とされているが，日程的にその余裕は無かったと思われる。
  - 6月，『臺筵小牘』，刊（→本年3月）。本書は13品についての論説で，附録は蘭山が若い頃に桜を詠んだ「<sup>はなかがみ</sup>花鑑」と，同門の浅井図南作「花錦」。前者は桜30余品を詠み込んだ和歌21首（→1753・4月），後者は宝暦4年（1754）6月の作で桜33品を詠った長歌。☆孫職孝は跋文で，蘭山は病弱だったが，還暦の頃から健康になったこと，眼鏡も使わぬこと，遠近の門下生が1000人に達したことを記す。
  - この年，『衆芳軒雜録』10巻を著す【28▶年表】。
- 文化6年（1809）81 ● 3月28日，若年寄堀田正敦邸での会読（→1807・5月）の2周目が終わった。4月13日からは『<sup>じが</sup>爾雅』を会読する予定という【14】。
- 春，門人の画家谷文晁に，左面からの肖像を描かせ，実子長谷川有義に与える【8】。☆『〔重訂〕本草綱目啓蒙』に所収されているのは，博物画家服部雪斎によるその模写図である。→1812
  - 4月，小野職孝編『本草啓蒙名疏』，刊。『本草綱目啓蒙』所収の和名・漢名をイロハ順に配列した索引で，その出版については幕臣より5部ずつ入金形で援助を受けた【7▶前年9月15日条】。☆せっかくの索引だが，構成が複雑で使いにくい。
  - 10月14日，浅草誓願寺内迎接院（<sup>こうじょういん</sup>檀那寺）とする。これまでは深川靈岸寺内智灯寮を宿坊としてきたが，かつて誓願寺に法教院（父方の祖母，正徳5年〔1715〕没【2】）を埋葬した縁があるので，同寺に宿坊を改めたい旨を方丈（住職）に本年春から申し入れており，それが諒承されたのであった【14】。3カ月後，蘭山はここに葬られ

- る。
- 10月, 幕臣岩崎灌園(常正, 24歳)が入門する【27】。のちに, 江戸時代でもっとも大部な彩色草木図説『本草図譜』を作成する。
  - 12月, 大槻玄沢, 広東人參(広參)について考察した『広參存疑』の稿を蘭山に呈し, 校閲を乞う。蘭山はそれに触発されてだろう, 自説をまとめた『広參説』を執筆, それが絶筆となった【6】。
- 文化7年(1810) 82
- 1月中旬, 大槻玄沢が蘭山を訪ね, 校閲を依頼した『広參存疑』の稿を受け取る。蘭山は疝痛で年末・年始にも登城しなかったが, この日は元気だった【6】。→前項
  - 1月23日, 「医学館会初ナリ, 其日北風烈シク吹」【10】。
  - 1月24日, 「寒氣至テ強シ。黄昏ノ頃ヨリ先生微ク感冒ノ氣味アリ」【10】。
  - 1月25日, 前日から風邪気味だったが, 自宅での発会日なので甘草の項を講義し, また弟子たちに『広參説』の稿を示したりした。しかし, 翌26日に病状が悪化【6, 10】。
  - 1月27日, 早朝に蘭山が病没(注8)。死の直前まで『広參説』を校訂していたという【6, 10, 11】。→2005
  - 1月29日, 江戸浅草誓願寺塔中迎接院こうじょういんに葬る。法名, 救法院殿顯現道意居士。表向きの死去披露は3月4日, 表向きの葬式は3月8日。墓誌銘は門下井岡 洌れつが撰, 並びに書し, 墓表は医学館主多紀元簡が撰して, 幕府右筆屋代弘賢が書した【10, 11】。☆誓願寺迎接院は小野家の宿坊(檀那寺)となっていた(→前年10月14日)。☆資料【10】原文の「向接院」「救法院殿顯文道意居士」は誤り。
  - 4月5日, 孫の小野職孝, 幕命により家督を嗣ぐ。物産御用役, 15人扶持。同21日, 医学館での講書と四谷薬園の管理を命じられ, 同23日から医学館で『本草綱目』の講義を開始する【7】。☆この後の職孝の動静については『本草学と洋学』【22】に詳しい。
  - 7月, 蘭山の絶筆, 『広參説』を刊行。序文は井岡 洌, 後書は小野職孝である。
  - 8月, 大槻玄沢, 自著『広參存疑』の後書【6】に, 蘭山に校閲を頼んだ次第と, 蘭山の発病から逝去までを記す。
  - 12月2日, 医学館主多紀元簡, 急死。三男の多紀元胤が跡を継いで新医学館主となる。
- 文化8年(1811)
- 3月, 職孝, 『本草綱目啓蒙』の再版願を差し出す。願は許され前金の1両2分2朱(1帙あたりか)が集まったらしい【7】。
  - 9月25日, 再版『本草綱目啓蒙』第1帙5冊(巻1~9)の販売が認

- められる【1, 15▶4節】。しかし、資金繰りが難行して、全巻の刊行終了までに20年ほどを要した。→1829
- 文化9年(1812)
  - 3月13日、蘭山実子の長谷川有義(安部民部, 陰陽生, 越後掾)没する, 年67【10, 22】。有義の許にあった蘭山の画像(→1809・春)は蘭山門下の平井宗七郎に託された【8】。→次項, 1829・4月
  - 夏, 門人平井宗七郎, 「先師蘭山小野夫子肖像之記」【8】を記す。
- 文化10年(1813)
  - 春, 平井宗七郎, 「蘭山小野先生小伝」【10】を記す。数か所に誤りはあるが, 当時の資料のうちでもっとも詳しい。山本亡羊編『蘭山先生生卒考』【13】に所収。☆『生卒考』には, ほかに「蘭山小野先生墓表」(医学館主の多紀元簡), 「蘭山小野先生墓誌銘」(井岡 冽)【11】, 「先師蘭山小野夫子肖像之記」(→前項), 「肖像贊」(山本亡羊)を納める。
- 文化12年(1815)
  - 10月, 宇田川榕菴著・蘭山小野先生鑒定『遠西鐸度涅烏斯物品考名疏』が成る。和名・漢名は蘭山による。蘭山は京都にいた頃, すでにドドネウスの『草木誌』を目にしていたようだし, ヨンストン『動物図説』や, ウェインマン『花譜』も見ていた。おそらく, 若年寄堀田正敦を介して洋書を見る機会も多かったのではないか【22】。
- 文化14年(1817)
  - 小野職孝編・小野蘭山審定『飲膳摘要補遺』, 刊(跋, 4月)。『飲膳摘要』(→1804・12月)の増補版。
- 文政11年(1828)
  - 蘭山門人鎌田碩庵が本年頃に執筆したと思われる『結夏随筆』<sup>けっげ</sup>巻2で, 蘭山は, 降雪のたびに顕微鏡を持ち出して雪の結晶を観察していた, それを数十年も続けていたと回顧している。蘭山の知られざる一面であろう。
- 文政12年(1829)
  - 3月, 再版『本草綱目啓蒙』の第2帙5冊・第5帙6冊を献上する【7▶文化10年条の丑3月付文書】。☆第3帙5冊・第4帙6冊は未刊だったが, 全48巻27冊が現存するので, 天保5年(1834)の江戸大火以前に刊行が終了したことは確実【15▶4節】。
  - 4月17日, 蘭山門下の平井宗七郎が没する。その許にあった蘭山の画像(→1809春, 1812)は, 同じく蘭山門下の福井 晋(近江守)に託された【8▶追加記事】。その後の経緯は不明だが, やがて小野家に戻される。そして平成13年(2001)に, 小野家に残っていた蘭山関係資料とともに国会図書館に寄贈された。
- 天保4年(1833)
  - 3月20日, 蘭山門下の水谷豊文が没する。尾張博物家の指導者で, 有名な嘗百社の中心であった。その著作『本草綱目記聞』(別名, 水谷本草)60冊は, 蘭山の『本草綱目啓蒙』を軸として編集したもので, 品目・記文・方言を増補した上, 『啓蒙』には図が無いので写生図や

- 印葉図（植物の拓本）を加え、「桜」や「羊齒」などの新しい部も設けている。残念にも未完成に終わり、また対象は植物に限られるが、『啓蒙』の大々的増補を試みた唯一の事例として高く評価される。☆本書の原本は杏雨書屋に所蔵されており、最近同書屋が翻刻版を刊行した。非売品であるが、主要な図書館には寄贈されている。
- 天保5年（1834）
- 2月7日、江戸大火。職孝宅も焼け、再版本『本草綱目啓蒙』や『本草啓蒙名疏』『飲膳摘要補遺』の版木が焼失【22】。
- 天保7年（1836）
- 5月、小野職孝編・小野蘭山審定『増補飲膳摘要』、刊。『飲膳摘要』（→1804・12月、1817）の改訂新版。『飲膳摘要補遺』の版木が焼失したため。
  - 10月、寺尾元長、『蘭山七種』（杏雨書屋蔵）の序を記す。「爾雅草木鳥獸部記聞」「救荒本草救荒野譜記聞」「秘伝花鏡記聞」「大和本草訳説・大和本草附録并諸品図訳説」「詩経名物弁解記聞」「十品考」「耄筵小牘」の7点を収録したもの【16】。
- 天保9年（1838）
- 4月1日、小野職<sup>もとよし</sup>愨<sup>もとみち</sup>、職<sup>もとよし</sup>実<sup>もとみち</sup>の長男として誕生。幼名は良助<sup>らいあん</sup>、通称蒼菴、号薫山【4】。
- 天保10年（1839）
- 4月、小野職孝、『秘伝花鏡彙解』を作成。蘭山の講義を整理したという。
- 天保13年（1842）
- 10月、小野職孝口授・小野職実録『救荒本草啓蒙』『救荒野譜啓蒙』、刻。蘭山は『救荒本草啓蒙』を刊行する意志がありながら果せなかった、その遺志を継ぐという。刊行は翌年の4月【4】。
- 天保14年（1843）
- 11月、小野蘭山・島田充房著／山本亡羊校『[新校正]花彙』、刊。初版（→1765）の版木を用いたが、草木名の約4分の1を亡羊が修正している。
- 弘化元年（1844）
- 9月、小野蘭山口授・梯<sup>かへし</sup>南洋増訂『本草綱目啓蒙』35巻36冊、刊。『啓蒙』の第三版、木活字本。梯は山本亡羊に師事したので、蘭山の孫弟子になるが、小野家・医学館には無断での出版だった【4▶本年11月条】。☆梯の増補には有用な記述も少なくない。
- 弘化3年（1846）
- 12月2日、岸和田藩前藩主岡部長<sup>ながちか</sup>慎侯<sup>しんこう</sup>医師井口望之が小野職孝宅に来訪し、『本草綱目啓蒙』再刻（四版出版）の件を伝える。これより先、職孝は初版・再版の版木がともに焼失した窮状を岡部侯に訴えていたらしい。その再刻の願が受け入れられたのだろう。そして、早くも同4日には岡部邸で再刻の相談が行なわれている【4】。→次項以下
- 弘化4年（1847）
- 1月16日、小野職孝<sup>もとよし</sup>・職<sup>もとみち</sup>実<sup>もとみち</sup>父子、岡部長<sup>ながちか</sup>慎<sup>しん</sup>侯<sup>こう</sup>を訪れ、多紀元<sup>もとかた</sup>堅<sup>もとあき</sup>・元<sup>もと</sup>听<sup>あき</sup>父子を交えて『本草綱目啓蒙』再刻の件を相談【4】。→前項
  - 2月6日、職孝が日記【4】の「金銀収納控」に、「五拾兩入、右啓

- 蒙譲り金也。尤、全部にて貳百兩之譲り金の内、当一月六日、五拾兩受取。来ル五月五拾兩、書物出来上百兩受取事」と記す。現代の著作権譲渡に当たるのだろう。→次項～1849
- 5月2日、職孝、五拾兩を岡部侯より受け取る【4】。→前項
  - 9月、小野蘭山口授・井口望之訂『[重訂]本草綱目啓蒙』48巻20冊、「岸和田邸学蔵版」として刊（刊記による）。→1846～次々項
  - 12月25日、職孝、「五拾兩、岡部侯より。都合貳百兩受取」【4】。→本年2月
- 嘉永元年（1848）
- 5月3日、小野職孝、『[重訂]本草綱目啓蒙』2部を岡部侯より受領する【4】。刊記は前年9月だが、出版の完了は本年になったらしい。→1846・12月～前項、次項
- 嘉永2年（1849）
- 8月、井口望之編『本草啓蒙図譜』巻8・巻9、4冊刻。岸和田藩前藩主岡部長慎（→前項）は『本草綱目啓蒙』に図が無いのを惜しみ、図譜を作成させた。図は、巻8山草部上を服部雪斎、巻9同下を坂本純沢が描き、ともに博物画の名手だけあって優れている。しかし、莫大な費用を要するからか、この山草部上下2巻だけで終わる。
- 嘉永5年（1852）
- 7月3日、小野職孝（初代蕙畝）没、年79。長男の職実（2代蕙畝）が跡を嗣ぐ。職実の息子が幕末～明治前半に活動した小野職愨（荅庵）である（注9）。→1838
- 安政6年（1859）
- 5月10日、蘭山の門人だった山本亡羊が、「蘭山先生五十年祭」を山本読書室第46回物産会として開く【21】。
- 明治6年（1873）
- 7月30日、小野職実（蘭山の曾孫）没、年75。子息の職愨が跡を嗣ぐ【22▶132頁】。→1799末
  - フランスの医師・植物学者で、慶応2年（1866）6月に来日したサヴァチエ（P. Savatier）が、『花彙』の記文を仏訳した“Botanique Japonaise Livres Kwa-Wi”を出版する。
- 明治23年（1890）
- 10月27日、小野職愨（職実の子）没、年53【22▶132頁】。→1838, 1852
- 明治42年（1909）
- 4月17日、小野蘭山、従四位を贈られる。
  - 4月18日、東京帝国大学小石川植物園において、「蘭山先生百年記念会」を開く（注10）。著作・遺墨など、470余点を展示。
  - 6月、東京植物学会、『植物学雑誌』269号を「蘭山記念号」として発行。
- 大正13年（1924）
- 2月5日、蘭山の墓が、東京府の史跡として仮指定を受ける【32】。
- 昭和2年（1927）
- 浅草の迎接院（→1810・1月29日）が関東大震災で被災したため、現在地（練馬区練馬4丁目：通称、十一ヶ寺）に移転【23】。

- 
- 昭和4年(1929)
- 4月, 岸和田市の岸和田銀行倉庫に保管されていた岸和田藩旧蔵品の中から、『本草綱目啓蒙』第四版と『本草啓蒙図譜』の版木(ともに全点)が発見された【12】。現在は, 東京国立博物館が所蔵する。→ 1847, 1849
  - 5月, 蘭山の墓が, 東京府旧跡(現在, 東京都指定旧跡)に指定された【32】。
  - 6月12日, 小野家の墓が, 旧地浅草から練馬に転じていた迎接院(→1927)の墓地に移された【32】。
- 平成13年(2001)
- 7月24日, 蘭山の子孫である小野 強氏が, 小野家に残っていた蘭山関係資料全点(蘭山の書幅や, 谷 文晁画の蘭山肖像画を含む)を, 国会図書館に寄贈。
- 平成17年(2005)
- 12月7日, 迎接院(→1927)の小野家墓地の整理の際, 蘭山の墓から墓誌が出土した(注11)。墓誌銘は『蘭山先生生卒考』【13】所収の「蘭山小野先生墓誌銘」【11】であった(→1813)。ただ, 『生卒考』では没したのが「正月二十七日」とある個所が, 「正月二十六日」と異なっている【23】。→(注12)
- 

(注1) 資料10などで「母は伊藤氏」とするが, 伊藤氏は父職茂の前妻。兄職秀・姉八尾・蘭山は, 3人とも後妻殿村氏(→1696)の子【2】。

(注2) 「図上」は「ずあげ」と読む。「書上<sup>かきあげ</sup>」に類する語。なお, この2資料は, 徳川吉宗政権下での全国産物調査において各藩が提出した報告書, 通称『享保元文産物帳』に属し, 『享保元文諸国産物帳』5(科学書院)に所収されている。

(注3) 蘭山が講述を繰り返した李 時珍著『本草綱目』52巻は1596年に明国で刊行, 早々と慶長9年(1604)以前に日本にもたらされた【31】。博物誌的記述に富む大著で, 江戸時代を通して博物家や医師はもとより, 文人にとっても座右の書で, 和刻本も数多い。蘭山はそれを訳述したのではなく, 『本草綱目』を導入部ないし素材として, 本邦の動植物を語ったのであり, それが門人を魅了した理由の一つだと思う。といっても, やはり『本草綱目』に制約されているので, 『本草綱目啓蒙』や講義筆記を見ると, 『本草綱目』に類品が無い動植物, たとえば, 鯛やマグロ, ナマコが取り上げられていない。それを補うのが貝原益軒著『大和本草』などの講述だったと思われる。そのほかテキストに用いたのは, 漢書の『爾雅註疏』『毛詩』『秘伝花鏡』『救荒本草』, 和書では貝原益軒の『大和本草』, 江村如圭の『詩経名物弁解』, 後藤梨春の『本草綱目補物品目録』, 香月牛山の『巻懐食鏡』など。

(注4) 杏雨書屋蔵『物産叢書』第7冊が「産物并唐蛮雑具」で, 末尾に「総計四百五十種／寛政十二年申閏四月／京都物産者 小野蘭山」と記す。

- (注5) 『蕙畝日記』【4】の天保6年(1835)条に記載されている小野職孝の「親類書」には、「私義、寛政十一己未年十月廿五日、祖父蘭山存寄を以、嫡孫承継ニ罷成候」の文がある(承継=継承)。一方、半年後の同12年(1800)5月9日に記された「長谷川有義宛書簡下書」には「孫養子にしたい」とあり、明らかに矛盾する。上記の「寛政十一己未年」が「寛政十二庚申年」の誤りで、同年10月25日に孫養子となったとすれば、話がよく合う。
- (注6) それぞれの採葉記のほか、蘭山の『日記』【14】や、『本草学と洋学』【22】にも行程や採集品が詳述されている。
- (注7) 江戸書物問屋仲間による割印は、刊行・販売認可の証であった【1▶解説】。
- (注8) 蘭山の編著作で、作成年が不明のため年譜のなかに収録しなかったものに、『薬名考』『蘭山禽譜』『蘭山魚譜』などがある【16】。
- 『薬名考』は15点の医書(傷寒論、千金方、外科正宗など)に出る薬品について、品別・産地・良否・製法・貯蔵法など実用的記事をかなり細かく述べる。
- 『蘭山禽譜』は天地2巻、鳥類309品の図譜【22A】で、東京大学総合図書館蔵の転写本『禽譜』(T86-177, 305品)が行方不明の原本にもっとも近いと思われる。木村兼葎堂著の通称『兼葎堂禽譜』は、この『蘭山禽譜』の転写本である。また、国会図書館蔵『蘭山禽譜』は、天之巻を欠き、地之巻のみの写本。
- 『蘭山魚譜』は幕医栗本丹洲の魚介譜などから抄写・編集したものと推定される。
- (注9) 職実と職愨については、職愨を職実の弟とするなどの混乱が最近まであった。
- (注10) 安政6年(1859)の蘭山五十年祭、明治42年(1909)の蘭山百年祭がそれぞれ49日目、99年目に開かれているのは、当時の数え年と同じ方式で年次を数えたからであろう。
- (注11) 『蘭山誌』【12】には墓誌について、「墓石ノ下ニ誌面ヲ抱キ合セ、埋ム」と記されている。昭和4年の墓移転の際に、当然ながら墓誌を発見していたとわかる。
- (注12) 『日本史小百科・暦』によると、日の出から翌朝の日の出までを1日とする習慣が、19世紀初頭にはまだ根強かった。それに従えば「二十六日」となる。また墓誌銘によれば、それを記した井岡は26日から蘭山に付き添っていたらしいので、27日になって間もなくの逝去を26日と思いこんでいたとも考えられる。いずれにしても、時計が身近に無い頃の話で、細かい詮索は意味が無いだろう。

資料一覧 (⇒, 資料が所収されている書を示す)

【江戸時代資料：書名の五十音順】

- 1 [享保以後] 江戸出版書目(新訂版), 臨川書店: 江戸書物問屋仲間割印帳の集成。
- 2 小野家系図, 国会図書館蔵: 蘭山の兄職秀が作成し, 蘭山の子孫が補訂したらしい。  
おのけけいず
- 小野蘭山公勤日記 →資料14
- 3 小野蘭山百年祭記録, 小野家編, 国会図書館蔵
- 寛政七年書簡下書, 小野蘭山 →資料19

- 4 蕙<sup>けいほ</sup>畝日記，小野職孝（初代蕙畝），東洋文庫蔵：親類書は冊5に所収。
- 5 兼葭堂日記（翻刻），木村兼葭堂，兼葭堂日記刊行会
- 6 広參存疑（大槻玄沢，国会図書館蔵／東京大学総合図書館蔵）・後書
- 7 御用留，小野職孝編，国会図書館蔵 ⇨蘭山先生日記，実学史研究，7号（資料14）
- 8 先師蘭山小野夫子肖像之記，平井宗七郎 ⇨本草綱目啓蒙4，平凡社東洋文庫
- 9 幕府医学館秘要録，医談，66～83号
- 範塾規 →資料19
- 本草綱目啓蒙，小野蘭山 →資料28（初版），平凡社東洋文庫（四版）
- 村松標左衛門宛書簡，小野蘭山 →資料26
- 10 蘭山小野先生小伝，平井宗七郎 ⇨本草綱目啓蒙4，平凡社東洋文庫
- 11 蘭山小野先生墓誌銘，井岡<sup>れつ</sup>冽 ⇨本草綱目啓蒙4，平凡社東洋文庫
- 12 蘭山誌，小野春雄編，国会図書館蔵：小野家蔵の文書・著作などからの抜き書で，明治以降の記事も含まれる。蘭山伝記の作成が目的だったようだが，未完成。
- 13 蘭山先生生卒考，山本亡羊編 ⇨本草綱目啓蒙4，平凡社東洋文庫 [翻刻]／江戸科学古典叢書44，恒和出版 [影印]：所収されている平井宗七郎の資料8が文化9年（1812），同じく資料10が文化10年の著作なので，その頃の編集か。
- 13A 蘭山先生摘録集，杏雨書屋蔵：蘭山若年時の漢書手写本など19点を収録。
- 14 蘭山先生日記，末中哲夫・遠藤正治編著，実学史研究，5～7号 [翻刻]：原本『小野蘭山公勤日記』（国会図書館蔵）も参照した。

【明治以降の報文：氏名の五十音順】

- 15 磯野直秀，日本博物学史覚え書7，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，26号：3・4・7節
- 16 磯野直秀，日本博物誌年表，平凡社：『蘭山禽譜』『蘭山魚譜』については，→磯野直秀，『蘭山禽譜』一写本の発見，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，13号／磯野直秀，『衆鱗図』と栗本丹洲の魚介図，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，15号
- 17 磯野直秀，小野蘭山の随筆，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，34号
- 18 磯野直秀，小野蘭山の『本草綱目草稿』，参考書誌研究，64号
- 18A 磯野直秀，『衆鱗図』について，『衆鱗図・研究編』，香川県歴史博物館編，同館友の会・博物図譜刊行会発行
- 19 磯野直秀・間島由美子，小野蘭山寛政七年書簡下書：付「範塾規」，参考書誌研究，63号
- 19A 伊藤圭介，尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雜記，錦寛翁九十賀寿博物会誌 ⇨吉川芳秋，『吉川芳秋著作集：医学・洋学・本草学者の研究』，八坂書房
- 20 上野益三，博物学史散歩，八坂書房
- 21 遠藤正治，読書室二百年史，山本読書室
- 22 遠藤正治，本草学と洋学：小野蘭山学統の研究，思文閣出版



- 22A 小野蘭山百年記念展覧会陳列品目録・同写真解説, 植物学雑誌, 269号
- 23 小宮佐知子, 東京都指定旧跡「小野蘭山墓」より出土した墓誌銘について, 文化財の保護, 39号: 墓誌銘の影印と翻刻を所収。
- 24 白井光太郎, 東洋博物学の泰斗小野蘭山先生の百年記念遺物展覧会について, 植物学雑誌, 264号 (⇒白井光太郎著作集1, 科学書院) / 白井光太郎, 小野蘭山先生ノ伝, 植物学雑誌, 269号: 内容の一部が異なる。
- 25 白井光太郎, 蘭山先生ト同時ノ博物家ニ就テ, 植物学雑誌, 269号 ⇒白井光太郎著作集1, 科学書院
- 26 白井光太郎, 小野蘭山翁書牘について, 植物学雑誌, 306号 ⇒白井光太郎著作集1, 科学書院: 村松標左衛門宛書簡, 13点を翻刻。
- 27 白井光太郎, [改訂増補] 日本博物学年表, 大岡山書店
- 28 杉本つとむ, 本草綱目啓蒙: 本文・研究・索引, 早稲田大学出版部: 本文は初版の影印だが, 「資料」部には再版以降の表紙・巻頭・刊記などの写真も掲載されている。
- 29 高橋達明, 小野蘭山本草講義本編年攷, 東アジアの本草と博物学の世界, 下巻, 思文閣出版
- 30 富士川 游, 小野蘭山先生ト医学館, 植物学雑誌, 269号
- 31 真柳 誠, 『本草綱目』の伝来と金陵本, 日本医史学雑誌, 37巻2号
- 31A 吉川芳秋, 尾張本草学の巨擘水谷豊文, 『尾張郷土文化医科学史攷』, 同刊行会
- 32 渡辺兼庸, 小野蘭山と東洋文庫所蔵の自筆本, 東洋文庫書報, 11号

### 謝 辞

本年譜の作成に当たっては、遠藤正治・小野 強・高橋達明の3氏に数々の御教示を頂きました。この場を借りて、御礼を申し上げます。